

小国地域委員会第二分科会報告

平成25年2月26日

小国地域委員会第二分科会長 田中実雄

1. 検討課題

「地域産業の活性化」

2. 検討の経過

・第1回分科会 平成23年7月20日(水) 16:00 支所会議室

出席委員：佐々木・内山・稲波・五十嵐

1. 正副分科会長の選任(次回へ持ち越し)
2. 検討事項の絞込み
検討課題の範囲が広いため、次回へ持ち越し
3. 視察先の決定

・第2回分科会 平成23年9月7日(水) 17:30 支所会議室

出席委員：佐々木・田中・内山・鈴木・稲波

1. 正副分科会長の選任
分科会長：田中実雄 副分科会長：五十嵐元
2. 検討テーマの決定
検討課題の範囲が広いため、就労者の高齢化や再基盤整備により地域に設立された農業生産組織の実態調査から地域農業の課題をさぐり、めざすべき方向を探ることとした。

視察研修

近隣の農家民宿、農家レストラン等観光交流の取組みの視察を検討。

・農業生産組織の視察・意見交換会 平成23年10月12日(水) 13:30

(農) 鷺之島生産組合

出席委員：五十嵐・田中・佐々木・稲波・原

生産組合：小川組合長、田辺副組合長

・第3回分科会 平成23年11月17日(木) 16:30 支所会議室

出席委員：佐々木・鈴木・稲波・五十嵐・板屋

(農) 鷺之島生産組合との意見交換会のまとめ

今後の予定協議

他の生産組織の視察や意見交換を行う。

・地域委員全体研修 平成23年12月14日(水) 栃尾市所 菅畑農家レストラン

栃尾地域 1. 温泉施設の取組み 2. かりやだ交流会の取組み

2. 菅畑農家レストラン

・農業生産組織との意見交換会 平成24年2月10日(金) 15:00 支所2階会議室

三桶生産組合

出席委員：五十嵐・田中・佐々木・稲波・原

生産組合：鷺尾総務部長

- ・第4回分科会 平成24年2月21日(火) 17:00 支所2階会議室
出席委員：田中・佐々木・五十嵐・稲波・原・内山
三桶生産組合との意見交換会のまとめ
中間報告取りまとめについて
- ・第5回分科会 平成24年5月22日(火) 14:00 支所2階会議室
出席委員：五十嵐・佐々木・稲波・内山・原・鈴木
6次産業の展開をめざした農産物加工事業の調査を行う
- ・農産物加工施設事業者との意見交換会 平成24年7月24日(火) 13:30
(農)ちやざわ生産組合加工部会
場所：鷺之島公民館
出席委員：鈴木・稲波・山崎委員長
(農)ちやざわ生産組合：田辺副組合長、加工センター長他4名
- ・第6回分科会 平成24年9月27日(木) 13:30 支所2階小会議室
出席委員：田中・鈴木・板屋・佐々木・内山・原・五十嵐
ちやざわ生産組合意見交換会まとめ
分科会報告に向けて協議
- ・第7回分科会 平成24年12月18日(火) 13:30 支所2階会議室
出席委員：原・内山・佐々木・稲波・五十嵐・鈴木
まとめに向けての協議
- ・第8回分科会 平成25年2月26日(火) 14:00 支所2階会議室
出席委員：田中・五十嵐・内山・佐々木・稲波・鈴木・原・板屋
報告書(案)の協議・決定

3. 報告

ア. 地域の農業生産組織の現状

規模や自然条件の異なる二つの農業生産組合との意見交換のなかで小国の対照的な生産組織の実態を知ることができた。また、いずれも現在将来の課題を認識しているが、解決に向けた具体的取り組みは多岐にわたり、これからというところである。

- ① 一つは基盤整備を出発点として組織した「平場」の生産組合です。(農)鷺之島生産組合では大区画により低コストを目指し、規模拡大経営を進めているが、集落単位を基本とした経営規模は他産地では個人経営も可能なものである。安定雇用の確保から6次産業化を目指しているが、生産、労務、加工、販売、施設管理、経理等、

その経営内容は多岐にわたる。

比重は少ないとはいえ、条件不利地である沢田をかかえ、低農薬等付加価値をつけたコメの生産、直販を模索している。

また、年間を通じての生産体制を構築し、地域の通年就労の機会確保も目指し、野菜生産用ハウスや加工施設を設置し生産を開始している。今後販路の拡大を進める必要がある。

- ② 一方、大区画圃場整備が不可能な山間地の取組みとしては平成23年設立された三桶生産組合の事例である。

発足したばかりで、実績はこれからとなる部分が多いが、条件不利地の生産組織として注目したい。

「平場」地域よりも一層高齢化が進む中で、耕作放棄地が一段と進むことから、地域の農業、しいては地域の存続の危機感等を背景として、「何とかしなければ」との共通認識のもと生産組合の立ち上げとなった。

アンケート等で地域住民の声を聞き、現状を把握しながら当面する問題の解決に当たることとしている。

特徴の一つは「作り続けられるうちは自分で耕作」であり、「ダメになったら組合で受ける」ということである。アンケートの中で規模拡大を考えている農家も少ないながらもあったことから、こうした農家を受け皿として耕作放棄を防止していくこととしている。

また、こうした動きに合わせ、農業振興地域の拡大を図り、中山間地直接支払事業では協定農地の拡大に積極的に取り組んでいる。

- ③ 稲作主体でスタートした生産組織ではあるが3農業生産法人が農産物加工施設を整備し、生産販売活動を開始した。一次生産物に付加価値を付け、地域の雇用の拡大や小規模生産者の力の活用に道を開き、経営の安定を図るものとしての取組みの意義は大きい。

(開発した商品 ⇒ お客の反応 ⇒ 商品開発、改良)のサイクル

楽しいと感じられることが原動力(仲間意識)

原材料生産から加工・販売まで(小さな6次産業の機動力を生かせる規模か)

イ. 課題

- ① 大区画圃場経営により低コストをめざしながらも、コメ生産だけでは安定就労や安定経営には課題があり、野菜や加工で通年就労の創出に踏み出している。生産から加工、販売と従来の農業とは異なり一次産業、二次産業、三次産業を併せ持った経営体制にふさわしい技術や営業、管理といった対応が必要であり、他の生産組合や他産業との人材等も含めた連携協力が必要との認識を持っている。また、地域においては農業に直接携らない世帯が増加することにより、従来からの共同作業や季節ごとの話題等、農業にまつわる地域コミュニティや将来の地域定住の課題も考えられる。
- ② 条件不利地域の中で耕作放棄地の拡大を防ぎ、集落機能を守り農業生産をどう継

続していくか。山間農業集落の共通課題である。

そうした課題を現実に即して地域の合意をもとに無理なく当面できることからスタートしている。農地への係わりを各農家の自由意志に任せ、耕作できなくなったときの受け皿としての生産組合の存在は地域の一定の安心感になるものと思われる。

しかし、将来を見据えると集落内の引き受け農家の高齢化の問題等課題は残る。

- ③ 加工品の完成度や販路といった課題はあるが、直接販売は消費者の生の声を聞くことにより改善や開発に結びつける必要がある。

販売ルートの開拓は事業者間の情報共有を図り、商品の競合を避け相乗効果が生まれるよう地域ブランドを生み出し、多様な販売ルートを作る必要がある。

ウ. 課題解決の方向

○生産組織も小規模農家も共に地域の担い手

- ・ 農事生産組合や農家の連携で小国ブランド（有機肥料等生産条件の統一）の農産物の産地化。（生産組織も小規模農家も共に地域農業の担い手）
- ・ 大型農業機械に頼らない複合的な生業（なりわい）の可能性を探る。（小規模多品目・有畜複合・山林活用・山野草等）
- ・ 一部生産組合で始まった加工商品の開發生産もそれぞれの組織独自の活動から地域の統一テーマの中で連携し得意商品分野を分担しメッセージ性をもったものにする。（○にこだわった△△）
- ・ 主力商品であるコメを主体に安心安全健康を意識した家庭の食卓を創造する商品など、トータルな提案型商品構成を作り出すことも考えられる。
- ・ 究極の6次産業である農村レストランへの発展。⇒女性の力の最大発揮（こだわりの現地食材を直接味わえる美味しさの提供。結果的に地域の魅力の発信。新たな小さな地域経済の創出・循環へ）
- ・ Iターン・Uターンも視野に入れた新規就農者の獲得

○トータルで推進する機能の創出

- ・ これらを進めるにあたって、中核となる組織を中心に関係団体、個人が参加する自由で柔軟な発想を発揮する推進の機能をつくる。
- ・ この機能は地域の生産物の流通・加工・販売等の連携の仕組みをつくる。
- ・ この機能は地域の総力で、生産組織の経営や新たな複合経営（生業）のモデルを創り出す。
- ・ 多くの人に係わることにより地域の魅力、デザイン「小国のイメージ」をつくる。